



ほっとかん

VOL.50



森の若葉

金子光晴

なつめにしまっておきたいほど
 いたいな孫むすめがうまれた
 新緑のころにうまれてきたので
 「わかば」という 名をつけた
 へたにさわったらこわれそうだ
 神も 悪魔も手がつけようない
 小さなあくびと 小さなくさめ
 それに小さなしゃっくりもする
 君が 年ごろといわれる頃には
 も少しいい日本だったらしいが
 なにしるいまの日本といたら
 あんほんたんとくるまばかりだ
 しょうひちりきで泣きわめいて
 それから 小さなおならもする
 森の若葉よ 小さなまごむすめ
 生れたからはのびずばなるまい

プラグを抜いて

「私が森へ行ったのは、思慮深く
 生きたかったからだ。」

ソロー「森の生活」

ソローは 人間が生きるには
 何が必要で何が必要でないかを
 徹底して考えぬくために、都会
 生活を棄てて森にこもり、家を
 作ることに、食料を獲得するこ
 とまで自分だけでやりつつ、生
 活について想いを深めた。

この過剰はたしかに生活を
 快適にはしたが、同時にだれ
 をも一種の無力感に陥れた。
 なぜなら、その進歩と開発
 はとどまるどころを知らず、
 こんどはどうやってたらこの無
 限の悪循環から抜けだせるの
 か、だれにもわからなくなっ
 てしまったからだ。

「次から次へ、より新しい、
 より便利な、より安価で品質
 のすぐれた商品が開発され、
 ぼくらをつつみ、押し流した
 した。新製品はつねに人びと
 にそれを所有しないでは現代
 人らしい快適な生活はできぬ
 かのような幻想を与え、人び
 とは次から次へそれにとびつ
 いた。そのころからだろつ、人
 が消費者という名に変わったの
 は。人間は商品を消化する消
 費者になった。それがすべて
 の始まりだった。」

だから、ここから自分を消
 費者ではなく人間として快復
 させるためには、まずこのぼ
 くらを包みこんでいる流れ全
 体にたいして「ストップ!」と
 手をあげ、立ち止って、「人間
 が人間らしく生きるためには、
 一体何が必要で、何が必要で
 ないか」を考える必要がある。
 すべてはそこから始まる。ま
 た始めなければならぬ。
 人間をダメにするのは窮乏
 よりも過剰であるかもしれな
 いと、そこから疑ってかかる
 必要がある。」

中野孝次「抑制と断念について」

とどまることを知らぬ購入
 所有、廃棄、新製品の生産、廃
 棄—この過剰な生産と消費の
 循環は、では本当に約束する
 とおりの幸福をもたらした
 か? すべては進歩の予言者

「子どもを不幸にする一番確実
 な方法はなにか、
 それをあなたがたは知って
 いるだろうか。
 それはいつでもなんでも手

に入れられるようにしてや
 ることだ。」 ルー

現代の生産=消費の悪循環の
 中で自分を取り戻すには、とき
 に、便利快適な生活から一時的
 にでも強引にプラグを抜いてし
 まうことが有効である。

今から二千年も前に生きた古
 代ローマの哲学者、セネカは言
 う。「人生が短いと嘆く人は案外
 に、人生そのものを生きるより
 も、その補助手段である職業や
 地位や収入や健康や財産やその
 他もろもろの、本来なら心の従
 者たるべきものの取得と維持の
 ために時間を浪費し、心そのも
 のとは向き合っていないのかも
 しれない。」

しかし、自分の人生とひとと
 向き合うとは、ある意味では恐
 るしいことでもある。

いままでは多忙にかこつけて
 見ないで過ごしてきたものと直
 面し、自分とはこれだけのもの
 であったかと決着をつける時が
 来たのだから。その恐ろしさに
 あえて立ち向かってこそ人は本
 当に生きた時を持つのであるう
 か。

技術とか科学とか社会生活と
 かは進歩しても、人間が生きて
 いくことに限っては、今日の
 人間も二千年前の人間と同じ課
 題に直面している、すなわち人
 間の生きることに限っては進歩
 はない。」

おかげさまで50号

粗にして野ではありませんが...

今回で、「ほつとらいん」通算50号を発行することになりました。また、三月十七日、二月定例県議会最終日に、福井県議会第93代副議長に選出されました。

ひとえに皆様のご支援の賜物と心からお礼申し上げます。

ふり返りますと、平成三年二月、三國町議会議員に初当選し、四月二十五日、第一号の「ホットライン」を発行して以来、15年になります。

改めて言ってもありませんが、「ほつとらいん」は、斉藤新緑の手作り新聞であり、一人で原稿を書き、編集し、仕上げて発行してきたものです。

当初は、まだワープロが出て間もない頃で、ハサミで、原稿を切り貼りして新聞にしてみました。今はパソコンを利用して仕上げています。

「人の代わりに、議会に出ているのだから代わりに発言することと報告すること」は、最低限やらなければならない議員の仕事だ」と大見できって、取り

組んできましたが、言うは易く行は難し。

議会が終われば、「ほつとらいん」を書き、配り終えれば、次の議会が来る。ずっとその繰り返しであったように思いますが、議会が終わってからの次の議会が来ることに早いこと、早いこと、それは、予習して授業を受け復習して、期末試験を受け、四年終わると入学試験がある学生みたいでした。

私は、他に何の職業も持たず、議員活動だけに専念しています。が、それでも、この最低限のことをやることで、アップアップしてきました。

「地方自治は民主主義の学校」、「その国の政治はその国の国民以上のレベルにはならない」などといわれます。

地域の政治レベルをあげる（正しい情報を提供する）ことは、その地域から出ている政治家の任務であり、正しい情報を提供し、考えていただく、議論していただく、という地方自治の原理原則に対して、どれだけ目的意識的に取り組むのか、その政治姿勢が重要だと思えます。

そのためには、決定したことを報告するだけでなく、背景に何があるか、どのような議論がなされているのか、それについて私はどう考えているのか、を



書くことが大事だと思って、心がけてきました。

34歳から49歳という男ざかりの15年を投げ打つての、汗と涙の「ほつとらいん」、費やした時間と労力もさることながら、費用面でも、議員報酬の半分相当は費やしてきたと思います。が、しかし、それが少しは地域の人のお役に立ったのだらうかと考えると自信がありません。

最近のある調査では、新聞を読む人が44%、平均21分ということで、新聞を読む人が5割を割り込んだといえます。から、「ほつとらいん」を読む人がどれくらいいるのかと考えるだけで、切なくなります。

それでも、「楽しみに待っている」という少数の声も大きな励みです。「出すことに意義がある」では、オリンピックの精神みたいですが、「意義」はともかく、私の任務は果たしたいと思えます。

かつて、町議会の先輩から、「新緑君、あんたマメに新聞書いてるようやけど、そんなものは選挙の時には何も関係ない

で」と意地悪といふ本当のことをいわれたことがありますが、その時飲み込んだ言葉があります。

「政治家は次の時代を考え、政治屋は次の選挙を考える」。

「言動は我にあり、評価は人にあり」。

「政治をあきらめさせない」ためには、政治家があきらめてはならない。

牛を押すように、黙々と粘り強く、根気よく、されど急いで

さて、今年4年任期の4年目、最終年度に入っただけで、私にとっても、県議会2期目の最終年度であります。この度、37名中36名（共産党を除く）の投票により、副議長に選出されました。

この上ない喜びであり、身の引き締まる思いですが、もとより、粗にして野で、格式はあったものが苦手なため、窮屈な思いをしています。が、頑張ります。最終年度といふこともあり、議会全体としても総仕上げ、次への展望を拓くものにしていか



できる限り副議長室に在室しようと思います。是非、お立ち寄りください。

ねばりません。

今年、文字通りドッグ・イヤーですが、地方自治を取り巻く環境は急ピッチで大きく様変わりしようとしており、中央の議会改革会議などに参加しますと、「鈍感な人は議員になつてもらうては困る」といわれます。

地方議会の「質」が問われてきていますが、私は、地方議会はどんな役目を果たす機関なのか、何のために議員は存在するのか、という原理原則に、より忠実になるべきだと思えます。

その上で、改めて前例踏襲を廃して、よりよいものをつくるためや議論を深めるために、どのような手段と手法がベターなのかを検討し、積極果敢な政策立案型の議会づくりをしていくべきだと思えます。

なんと、いつても議会がその自治体の最終意思決定機関なのですから、しっかりとしなければなりません。



この度の斉藤新緑先生の第九十三代福井県議会副議長ご就任を心よりお祝い申し上げますとともに、後援会報「ほっとらいん」の通算五十号発行をお慶び申し上げます。

斉藤新緑先生は私と同じくサラリーマン生活を経て、町議会議員として県議会議員として活躍されてきました。県議会で総務教育常任委員会、環境・エネルギー対策特別委員会の委員長等数々の要職を歴任されるなど、斉藤先生の誠実で力強い活動は衆目の認めるところであり、その実績は高く評価されておられます。

その斉藤新緑先生と私は平成十六年八月に私が自由民主党福井県議団主催の夏期セミナーに講師として招かれた時以来のお付き合いです。当時の私は平成十五年の総選挙で一敗地にまみれ、浪人中でありました。そんな時斉藤先生が地元福井県の陳情で幾度となく上京され、私のところへも相談に来られたので、福井県のために是非力を貸して欲しいという斉藤先生の熱い気持ちに私も強く伝わって参りました。

とりわけ福井港の開港指定の件では福井港を国際貿易港としての港

湾物流拠点とすべく東奔西走され、そのような斉藤先生の熱意が福井港の早期開港につながったものと確信しております。その後衆議院福岡一区における補欠選挙の際には私の応援のために福岡までお越し頂き、お力を賜りました結果、私も無事再選することが出来ました。

この9月には自由民主党の総裁選挙を控え、小泉構造改革の総仕上げの時期を迎えております。国と地方の危機的な財政状況を克服するため、また今後少子高齢化が一層進展する時代にわが国の活力を回復維持していくために、小泉政権はこの五年間、官から民へ、国から地方へへの考えの下、地方分権を推進してきました。

小泉政権の次の指導者は、内政面では社会保障制度改革、財政再建問題等において今後もこれまでの改革路線を踏襲する一方で、格差社会の是正にも取り組んでいかなければなりません。また外交安保路線においてはアジア重視に大胆にシフトすべきだと信じます。

このように国と地方自治が新たな段階に入る中において、わが国の更なる発展と豊かな二十一世紀を創造するため、斉藤新緑先生共々取り組んでまいりたい所存です。

福井県の発展のために今後の活躍が最も期待される人材である斉藤新緑先生が、持ち前のバイタリティーと政治に対する熱き情熱をもって今後更に活躍されることをご期待申し上げます。

衆議院議員 山崎 拓

斉藤新緑先生のご活躍に期待申し上げます！

衆議院議員 高市早苗



一昨年に福井県に嫁ぎ、本籍地は福井県鯖江市、住民票は選挙区の奈良県・という状態の私ですが、情が深く温かい福井県の方や北陸の美味しいお酒や海の幸に出会えて、幸せ一杯の日々です。

斉藤新緑先生は、主人(山本拓)の大切なお友達ですが、私も、新緑先生の愛嬌一杯の笑顔と卓越した行動力に魅せられたファンの一人です。

新緑先生が昨年発行された県議会報告を拝読してありましたら、「ステーツマンシップ」という言葉が紹介されていきました。高い志を持ち、私を捨て、公の為に働く政治家の姿勢です。

今秋に予定されている自民党総裁選挙は、新しい日本国総理大臣を選出する重要な選挙です。私たちには、新緑先生が訴えられる、「ステーツマンシップ」を持つリーダーを創る責務があります。

私が二〇代の頃に師事した松下幸之助さんの言葉を、改めて思い出しています。「一國の総理大臣たるべき人は、誰よりも

も国を愛し、国民を愛し、誰よりも国家国民の繁栄をより高き形で生み出すとする強い信念と実行の人、勇気と情熱の人でなければならぬ」

「政治家は自らを公僕と呼んではならない。そんなことでは、偉大な国家経営の理念は生まれてこない」

指導者の立場に立つ者としては、衆知を集めることが非常に重要である。産業構造・社会構造の大きな転換期にあって、国にも地方にも、ステーツマンシップを持つリーダーが求められます。

昨今は、人気と公益が二律背反の命題になっているような気がします。

残念ながら、マスコミ報道等によって形成された世論が公益に合わないと思われるケースもあります。そのような場合、選挙で政策判断の負託を受けた政治家が真意を持って有権者を説得し、日本の未来図を示し、的確な政策を実現することが求められます。勿論、政治家が政策判断に至るまでには、謙虚に主権者たる国民の、衆知を集める姿勢が不可欠です。

素晴らしい新総理大臣が誕生することを願いますと同時に、私たちの大切な福井県の為に、真つ直ぐな気持ちで郷土を愛して行動される斉藤新緑先生が、益々ご活躍下さることを祈念しています。

前国務大臣・防衛庁長官の大野功統先生は香川3区の選挙区で、時々、娘婿殿が福井県に出向されていたこともあって、三國の花火を見に来たり、カニを食へにお忍びで来福されたりするの、何度となくお会いさせていただいている。

市ヶ谷の防衛庁長官室にもお邪魔したことがあるが、今回も上京すると申し上げたら、昼飯でも食べようということになって、国会議事堂のそばのレストランで名物の定食をご馳走になって、よもやま話をさせていただいた。

(大野)西川知事はお元気ですか(かつて知事は、自治省時代香川県に出向されていたので、よくご存知のようだ)

(斉藤)はい、元気で頑張っております。

(大野)ところで、どうですか、地方議員から見ると、小沢一郎党首は?

(斉藤)最近、切った張ったの話ばかりでしたから、徐々に政治家がきちんと話してると感じまして、私にはちょっと新鮮に映りました。

(大野)ほあ。具体的には、何か言ってますか。

(斉藤)地方に任せられないといつまでも中央が権限を手放さないでいないで、地方分権して、とどろん地方の権限を与えればいいんだ。

道路造ろうが学校を建てようが、地方で好きなようにやればいい。その結果、どうなるかと地方の責任だし、たとえ失敗しようが日本の国には何も大した影響はない。

そんな感じのこと言ってます、スッキリしてると思いました。

(大野)あ、そう、それは、私も同感だ。改革というのは、上層だけ直そうとして、もためた。

そうか、それじゃ、自民党も気をつけんといかん。

(斉藤).....

ーみたいな感じで、食事をしてました。

でも、その後、その予感的中して、まづここになります。

このとき、議員会館のいくつかの部屋で、斎藤健一という若くていい男のスタッフ、キリしたボスターが貼られていたのですが、これが、4月23日投開票された「衆院千葉7区補選」僅差で民主党候補に惜敗した候補者だったのです。

エリート中のエリートで、若くてハンサムで、これ以上の候補者はいないと感じていたが、候補者には気の毒な選挙だったように思えます。



大野功統先生との昼食風景



八重子

ほつとらいん 発行五十号はこの度の副議長就任お目出たつとございます。

先日原稿の依頼を受け、返事はしたものの議員と私との出逢いはあまりにも古く、薄れ行く記憶を呼び起こし、書く事になりました。覚えていますが、在職中、長期に渡り、青年団活動に対して理解され、青年団に大きな夢と希望と情熱とロマンを与えてくれました。時には母として時には恋人として私たちを支えてくれた事は大きな力でありました。これは、私が農協を定年退職をする時、青年団から頂いた感謝状の一部です。一緒に頂いたブローチも大切に宝飾箱に仕舞われています。あれから12年が経ちました。

私が原稿を書く時、外せないのが私の仕事と職種です。当時、営農とのタイアップで設置された生活指導という活動は、今迄、経験のない私にとって、行政はもとより、農家を始めたとする地域、公民館、学校、各団体の協力が先決で、当時、衣・食・住において、決して豊かとは言えない農家の生活に入るのには並大抵の事ではありませんでした。思い出に残る活動を上げるとすれば、県下生活指導員の名の協力を得て、モデル三集落の生活実態調査、また当時の加戸小学校、PTA、婦人部、老人会との強力を得て実施された5年間

にも及び、ことこの健康を守る運動です。これらの調査活動が基になり、青年団との活動が始まりました。若者が住みたいと思ふ町づくり、村づくり、がテーマだったと思います。資料作り、集落へ出向いての座談会など、意見が合わず物別れになった日もありました。こうした活動を通して、議員との関わりを持ち、若い人達との出逢いが私もいい勉強をさせていただきました。この間、議員は、活動の範囲を町政から県政へと広げ、その活躍は、ほつとらいんを通じて、我が家にも知らされています。人はよく、定年後の人生を第二の人生と

いいますが、当時、指導を受けた大阪医科大の吉田寿三郎先生は、第三の人生と言われました。私もこの言葉が好きです。平均寿命が延び、第三の人生が長くなり、私も退職時に聞かれ、ボランティアと答えています。退職して、2年いるのボランティアに参加してききました。

平成元年以降は、民生委員児童委員として地域福祉に参加しています。今日まで自分が選んだ第三の人生、心身ともに健康に過ごして来ましたが、そろそろ第三の人生も幕が降ろされようとしています。これから

の人生は自分が選ぶ事の出来ない日々が待っていると思います。いかに幸せな人生だったと言われる様その日が来るまでは、地域の中で、心身ともに健康でありたいと願っています。

今日は、古い皆さんの知らない議員との関わりを書きました。今度は自分が選べない人生について語り合えればと思います。議員も健康には十分気を付け益々の活躍期待しています。



池上は継体天皇の離宮だった

と新緑君とは、同じ池上村に生まれ、池上で育った、同級生であり、この世に、生を受けた月日も同じという「関係」であります。

思い起こせば、十五年前、ただの一年である新緑君が三十四歳で、「新しい風を創る」をスローガンに町会議員に立ちました。

雪が舞い散る寒い日の出陣式、池上区民館の前で多くの支援者の下、演台の上に立ったあの姿、感動が今でも忘れる事が出来ません。若かったこともあって、本番の選挙よりも、あの当時、在所の推薦を受けて選挙に出馬するところまでたどり着けるかどうかの方が心配だったからです。

当選した間もなくの時、笑い話の様な事だが、仲間の前で「日本一の町会議員になってみせるから」と真顔で約束していた事が思い出されます。

彼は青年時代から不器用ながら、自分で目標を言って人に約束をし、自分にプレッシャーを掛け、その約束を果たすといった、強い「使命感」「正義感」「責任感」を持ち合わせた男だと感じています。

誰にもマネできない

近藤 武弘

「思は議員の本業(仕事)で返す」彼が常々、口にする言葉です。

町会議員とは何をしているのか、町の動きはどのようにして決まってくるのか、まったくわからない私たちに、まず彼が最初にくれた「仕事」は議会の報告、町の進み方の報告であり、本人の考えを人詳しく説明してくれました。これが「ホットライン」です。

いろいろな政治に携わる人達の機関紙「もありますが、一〜二回発行してそれっきり」というのや、議員本人の「アルバイト」か「後援会だより」の様なものばかりです。

あれだけの新聞を書くのは大変な仕事です。「費用」も掛かる為、私自身もこれほど長く発行するなんて思いも寄らなかつた次第であります。

「継続は力なり」といいますが、十五年間やり続けるなど中途半端では出来ません。彼の強い意思が伺えます。

今年、私達も人生半ばの五十歳になります。成熟した「年頃」であり、心身共に最高の時であります。その中において、新緑君は県会議員として、ましてこの度「副議長」という要職に就いた事は私達の活力であり誇りに感じ

ます。と同時に十五年前、これ程までやってくれるという事を、誰が想像出来たでしょうか。日本一の町会議員発言で内心笑ってはいませんが、よく頑張ってきてくれました。

新緑君を見てみると、議員は大変だと思える事が多い。当然ながら議会はチェック機関、数々の専門的知識を自分自身で養わないと、執行側と張り合えない。必然的に専門書に目を通す機会が多くなる。頭の痛くなるような本、彼は時間があると読んでいます。勉強している。夜中でも。

以前から政治の話になると、必ず出てくる言葉がある。誰が選挙に上がったも同じ。何も変わらんし。

しかし、この男(新緑)を見てみると、誰がなっても同じではない。本気の議員が一人いるだけで、これだけやれる、変わると思えるようになってきた。素晴らしい事である。これだけの議員活動をしている者はいらぬのだらうか。

斉藤新緑と言ふ男は、自分の身を守る為にはなく、よりよい地域創りを為す為に議員をしているのであって、その為なら人に嫌われる事も、平気で主張し、行動する男です。ぶれない、しっかりとした信念があります。

大変だろうが、ほつとらいんも一〇〇号めまで頑張って継続して欲しい。誰も出来ないことだ。馬鹿馬鹿しいこともあるだろうが、議員の手下になるように頑張ってくれ。ずっと応援して行かへ。

新緑さんの

「ほつとらいん」を祝って

浅川 静子



「ほつとらいん」50号発行おめでとうをいいます。いつもユニークなネットワーク会報を県議会報告としてだけでなく新緑さんの熱心な政治活動を知る窓として、読ませてもらっています。中でも「新緑の気ままにトーク」などの詩情溢(あふ)れる文章は、話題の豊かさについて引き込まれ、他の会報にない楽しみがあります。
中学時代、新緑さんは大変まじめな、読書好きの生徒でした。今もきつと多くの本を読んでいらつしやることでしょうか。だから、「ほつとらいん」をいろいろな面から読みこたえのある報告に出来るのだからつと思えます。
近頃は本を読まない生徒が増えていると聞きますが、豊かな心を育てるためにも読書を勧めたいと、新緑さんの旺盛な読書意欲を思い出しながら感じています。
「ほつとらいん」がますます継続発展されますようお祈りして、お祝いの言葉といたします。

齊藤新緑議員の分身

「ほつとらいん」にふれて

式内伊保社

神主 松村 忠祀



何時も、齊藤新緑議員の発信する『ほつとらいん』に触れるたびに思うことがある。それは、何年か以前のことがあるが、朝日新聞東京本社の某氏がふと美術館に立ち寄りられて地方の政治を寸評されていた中で、『ほつとらいん』にも触れていた事がある。
彼は、東京から久方に訪れた北陸の名物、越前そばが大好きで、三回のそば屋さんの辛口の大根おろしとかつおのぶっかけそばを賞味しながら、ふと座右にあった『ほつとらいん』に目を通しているうちに某氏は、「今日地方政治の世界も利害や選挙のことなどで政界は汚れ切っている中で、この機関紙の刊行物は面白い。地方にも現況の多様化されていく社会の中で四苦八苦して汗を流されている政治家もいることをこの目で知った。」と私に深く寸評して帰られたことを、昨日の出来事のように覚える。
そのことが、今でも『ほつとらいん』が届くたびに思い出される。この『ほつとらいん』は新緑議員の足跡でもあり、また、齊藤政治の分身ともなっている。機関紙は世間によくあることだが、『ほつとらいん』は、単なる議会の報告紙ではない。議会のこととは勿論のこと議員の人間臭(にお)をもよく記されている。政治ばかりでなく、芸術・文化・スポーツに至るまで幅広い領域の記事の中で積極的に紹介されてこ

れたことであらう。それが今目的な一つの政治風景となり、『ほつとらいん』として年輪を重ね、素顔となつていく。
特に近代以降の地方ほど東京志向の時代もなかったであらう。けれども今は、東京志向の時代を横切り、地方独自の地域土壌を創出し、独自の自然風土を大切に生かし、今という日々の時空の中で、岡本太郎の今日的芸術を創出していかなければならない。そして福井における道元の「正法眼蔵」の深い思索を創出し、朝倉氏の品格に富む文化を創出し、近松門左衛門の文楽の世界の原風景は、岩佐又兵衛の福井時代の傑作「小中常盤」などと関わってきたものと思われ。
近代になると福井と関わっている

特集号編集に当たって

「ほつとらいん」50号記念号特集として、何人かの皆さんに登場願いました。
登場人物には、特に深い意味はなく、ちよつと副議長就任のご挨拶に上京して、お会いできた方々やその前後にお会いした方で、気軽に心じていただいた方に、「何でもいから書いてください。」

中山千夏さんは、丸岡の一筆啓上の表彰式で、25年ぶりにお会いして、ご挨拶したご縁で、一筆啓上願ったものです。
彼女も忘れていたように、私も、なぜ当時、中山千夏さんを成人式に招いたのか、はつきり覚えていないのですが、青島幸雄 八代英太と

ワイドショーに出ていて人氣があったからなのでしょうかね。しかし、オジサン呼ばわりするとは思わなかった。
高市早苗先生は、「うれしいと大喜びするので、私に会いたかつたのかと思つたら、芦原温泉駅で買つていったお土産の「さばのへし」」が大好きなのだそう。
高市早苗先生は、「うれしいと大喜びするので、私に会いたかつたのかと思つたら、芦原温泉駅で買つていったお土産の「さばのへし」」が大好きなのだそう。
高市早苗先生は、「うれしいと大喜びするので、私に会いたかつたのかと思つたら、芦原温泉駅で買つていったお土産の「さばのへし」」が大好きなのだそう。

地元の国会議員の先生は、地元でご挨拶したので、特にアポとらなかつたので、どなたも留守でした。でも、たまたま、国交省へ行ったから、副大臣室におられて、写真撮影をしました。
副大臣室からの展望は素晴らしい。国会議事堂の桜がきれいに見えました。

地元の方々、特に説明を要しないと思いますが、浅川静子先生は、私の中学一・二三年の国語の先生でした。
「協力有難うございまして。100号になったときは、またお願いします。」



◎◎ 国土交通副大臣室で松村先生と

投資額 44 億円、雇用者数 150 名、毎月 2 ~ 3 隻の外航船

ファーストウッド(株)が、テクノポート福井に進出

やつほく ついに港を利用す
企業がやってきたる

福井港「更なる躍進！」

定期航路開設、外航船 200 隻達成も夢じゃない。

県は、4月20日「ファーストウッド(株) (本社 東京都) がテクノポート福井に進出することを発表しました。

「ファーストウッド(株)」は、全国的に戸建住宅などを建築・販売する「一建設(はじめけんせつ) (株)」の子会社であり、ロシアから輸入した外材や国産材を工場加工し、その建材を一建設などに供給することとしています。

特に注目されるのは、材料となる木材を輸入するため、操業が予定されている12月あたりから、福井港に毎月2~3隻の外航船が入港することになることです。仮に、毎月3隻の外航船が入港することになると、福井港の外航船入港隻数は、1年間で36隻増加することになります。

また、工場の操業が安定し輸入が定期的に行われるようになれば、ファーストウッド(株)以外の企業が、この船を利用(混載)して

輸入を行ったり、帰りの船を利用して輸出を行うことが考えられます。

近い将来、ファーストウッド(株)の利用が核(メインカーゴ)となることで、ロシアと福井港との定期航路が開設されることも夢ではありません。

さらに、ファーストウッド(株)の投資規模は、約44億円で、約150人の地元雇用も見込んでおり、県内経済の活性化にも大きく貢献するものと期待が持てます。

17年の外航船入港隻数は101隻でしたが、今年(昨年)以上のペース(1月から4月までの4か月で45隻)となっており、ファーストウッド(株)の操業が本格化する19年になれば、外航船の入港隻数が200隻を達成することも夢ではないようです。



福井港が開港した昨年、はじめて福井港から、直接、外国(釜山港)に入港し、出航して、直接福井港に帰ってきた豪華客船「ふじ丸」でのクルージングを実施しました。

福井港を貿易だけでなく、観光を目的として、海外との交流を深めるといふ見地からも利用し、毎年一回は定期交流として取り組んでいきたいと考えてきました(これも定着すれば、れっきとした年一回の定期航路です。)

昨年、好評だったこともありますが、今年、JRSが主催していただいています。

今年、昨年の「ふじ丸」よりも、ワンランク上の豪華客船「ふじ丸」を「ふじ丸」を利用します。昨年、客船利用による船旅がブームのよう、ずいぶんからの予約が入っているようです。そのため、今回は、福井港から釜山港までの片道だけの利用とし、帰りは飛行機利用となります。

コースは、釜山(1泊2日)・ソウル(2泊3日)・慶州・釜山(2泊3日)・済州島(2泊3日)の四コース。福井港開港1周年、福井市、坂井市各々の合併の記念号です。ぜひ、福井港の利用促進、港だけでなく地域全体の活性化のためにもご協力下さいませ、お願い申し上げます。

湖上

中原中也

ボツカリ月が出ましたら、
船を浮かべて出掛けましょう。
波はヒタヒタ打つでしょう、
風も少しはあるでしょう。

沖に出たら暗いでしょう、
權かりから滴た垂たる水の音は
呢ね戀こしいものに聞こえましよう、
あなたの言葉の杜こ切きれ間まを。

月は聴きき耳みみ立てるでしょう、
すこしは降りても来るでしょう、
われら接つ觸ふする時に
月は頭上かみの上にあるでしょう。

あなたはなおも、語るでしょう、
よしないことや物もの事ことや、
洩はらさず私は聴きくでしょう、
けれど漕こぐ手てはやめないうで。

ボツカリ月が出ましたら、
船を浮かべて出掛けましょう、
波はヒタヒタ打つでしょう、
風も少しはあるでしょう。

新緑の気ままにトーク

「五月の朝の新緑と薫風は私の生活を貴族にする」と秋原明太郎の詩の一節にあるが、今年ほど、しみじみと新緑の美しさを感じ、圧倒されたことはない。

吉川英治が嫁に書いた、幸せな人と問わば……という手紙の中で、たとえ三坪の庭でも、楽しみを持って、人生植えるものは多い、と書いているが、緑色といつても何種類もある。若草、萌黄、松葉、青緑、常盤、若竹色。心の持ち方一つで身の回りの小さな喜びを集めることが出来るかと実感する。

陰陽師おんやうしの安部清時は、「一番短い呪まじは名だ」と言ったのだが、私も十月に生まれて「新緑」という冗談のような名を頂戴して50番目の新緑の季節を迎えた。

オヤジは新左衛門、オババは三ツリ、合わせて「新緑」、あるいはお茶屋の新緑」といつ安易な名づけ方だったのか、ハゲ頭にねじり鉢巻、茶袋のような猿股ひついで、鼻歌を歌っていたオヤジがどんな「呪文」をかけたのかは知る由もない。

ところで、若葉は初夏、落ち葉は晩秋が相場であるが、推落ち葉、櫻落ち葉、樟落ち葉は、初夏の季節となる。

広葉常緑樹の多くは、若葉の季節が落ち葉の季節になるからで、若葉が育つのを待ってから古い葉が静かに

枝を離れる幸福な新旧交代と言え、人の世では、若葉を見ることなく古い葉が落ちていく自然界の掟破りの状況が見えてくる。

緑のランドセル
宇宙飛行士の向井千秋さんが、小学校に入学したとき、親から緑色のランドセルを渡された思い出を夕刊で読んだ。

「実家はかばん店を営んでいた。父は中学の教師で、母が一人で店を切り盛りしていた。人と違ったものを使った方がいいとかで、店に見本で置いてあった緑のランドセルを使えというのだ。

当時カラーのランドセルの走りどころとはいえ、田舎では使っている子供はほとんどいない。男は黒女は赤が決まり。ほかの子と違っても嫌でたまらなかつた。入学の二日目から、みんなからかわられて泣いて帰ってきた。親は、そんなやつは泣かせて帰ってこい」と取り合ってもくれなかつた。

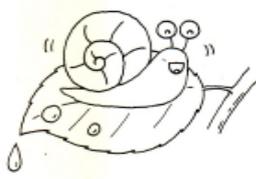
でも、毎日背負って通学するうちに、そのランドセルが大好きになつた。理由は自分しか持っていないから。周りは同じものを持っているといじめたりするが、面白いことに自分がこれだけでいいでしょう」と言い始めると、逆に欲しがつたりする。あのランドセル以降、私の人生への態度が変わつたような気がする。

幼い頃に医者になろうと決心して、その目標を追い続けられたのも、そんな人生への態度が関係していると思う。脚を悪くした弟を自分が治したいと思ったのが契機。小学校四年生の時の作文に、将来医者になりたいと書いた。医学部に入るためには東京の高校に入るのが近道。そう思って中学三年の時に、親を説得して、東京の中学に転校した。

勉強にしても何にしても、他人が二時間やるなら三時間やらないとだめだというのが信念になつていった。最近めいっ子たちにもよく話。人と違うことをやりたかつたら、よく人のやるのを見ていて、それとは違った面白さを見付けたいとだめだよ。

父も母も、私の思考を何事にも前向きにポジティブに変えていくようにしていたと思ふ。試験の意味で、緑のランドセルを持たせてくれたことに感謝している。宇宙飛行士になつたあと、家族に頼んで、同じ色のランドセルをミニチュアで作つてもらつた。それくらい、思い入れの強い品だ。本物は行方不明になつているが、いつか見付け出して背負つてみたい。

五月も過ぎようとしているのに、京都の料理屋の玄関には武者人形が飾つてあつた。端午の節句が過ぎても六月までは飾るよつた。



龍門は、中国、黄河の上流の激流、そこを登りきることのできた鯉は龍になる。これが登龍門。鯉こいを五月だけでなく、日本だけでなく、世界に発信せよ、といったのは岡本太郎。あの顔が鯉こいになつたりして、いろんな鯉こいが空を泳ぐことを想像しただけでも面白い。

我が家は、離人形りじんがたしか関係ないので、この場合、仕舞い遅れると婚期があぐれるといつので、桃の節句が終わるとそそくさと片付けられるが、昨今の女性の晩婚化、非婚化を見るにつけ、離人形りじんがたを仕舞い遅れたルーズな母親が多いから、そもそも離人形を出さなかつたからか、などと馬鹿なことを書いていたといつ、我が身に降りかかるかもしれない。

「新緑の気ままにトーク」の「愛読ありがと」に載っています。

「新緑の気ままにトーク」と改称したのは12号からで、当初11号までは、「新しい風通信」という名で、編集後記として、余裕があれば時々書くといつ程度のものでした。それがいつのまにか、最後のページが楽しみといわれ、「気ままにトークから読み始めます」、「ページとページ」といわれるようになって、だんだんと、ほつとらいいたの最も読まれるページになつてしまつたよつた感じが、手抜きできない。

「あ、おまへはなにをしてきたのだと……」吹寄来る風が私にささやくと、かつて中では歌つた。

「ほつとらいん」書き続けて15年、何をしてきたのか知らねども、とらあえず、こんな汗をかいてきた。

50号発行記念特集号、お届けします。お待ちしております。日頃の心からお礼申し上げます。

ふるさとの山に向かいて言ひことなし。有難き緑雨。